HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	障害を持って生きるクライエントを支援する作業療法士の専門職アイデンティティの構造［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	髙島, 理沙
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(看護学)
Dissertation Number	甲第11122号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53847
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Risa_Takashima_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（看護学）　　氏名：髙　島　理　沙

学位論文題名

障害を持って生きるクライエントを支援する作業療法士の専門職アイデンティティの構造

作業療法士とは、医師の指示のもと作業療法を行うリハビリテーション専門職の一つであり、2013 年 4 月 1 日現在、我国の有資格者は 68,935 名に上る（日本作業療法士協会 2013）。年齢や性別を問わず、疾患や障害によって生活に何らかの困難が生じる様々な人々が、作業療法を利用する。リハビリテーションは心身機能の回復訓練というイメージが強いが、実際にはそれだけに留まらない。日本作業療法士協会（2012）は、「作業療法の最終目標は、障害の軽減にあるのではなく、主体的な活動と参加を援助することにある」と説明している。しかしながら、『作業療法白書 2010』では、特に身体障害領域において、作業療法の目的第 1 位が「運動機能の改善」であることを初めとして、「上肢機能の改善」や「起居動作の改善」といった運動機能の改善が上位に並んでいる。

先行研究では、運動のような身体的に理解されやすい現象であっても、身体が物体としてうまく機能するかどうかという身体的な側面からではなく、クライエント（以下、CL）の視点に立った別の側面から捉え直せば、個々人にとっての特別で重大な意味が隠されていることが報告されている（細田 2006，髙島 2011，髙島 2012）。

そこで、第 1 章の『身体に障害を持って生きるクライエントの運動の意味』に関する研究では、身体的な現象に留まらない CL の視点から見た運動の意味を、CL が片麻痺を有しながら生きる姿勢や困難、苦悩の経験から理解しようと試みた。人々が自分たちの生きている世界をどのように理解して経験を意味付けるのかを探求することに適している解釈学的現象学の方法（Cohen ら 2000）に基づいて、片麻痺を有する 18 名の研究参加者に、1 回、約 30～100 分の個別のインタビューを 2～3 回行った。インタビューガイドとして「半身が麻痺したことはあなたにとってどういう経験でしたか？」、「半身が麻痺してからあなたに起こったことを教えて下さい」などの質問を用意した。答えにくい場合は脳卒中になった当時を振り返ってもらい、続いて起こった印象的なエピソードを語ってもらった。データ分析では、①「データに浸る」、②「データの変換」、③「テーマ分析」を行った。

結果、参加者の片麻痺に起因した運動変化の経験は、以前の自分との相違として次の 7 テーマで表された：〈不可避の依存〉、〈無能な感覚〉、〈自律無視の他律〉、〈逸脱の象徴〉、〈甘えの許可証〉、〈人間の優劣の指標〉、〈努力の証〉。作業療法士が実存的に CL の経験を理解、解釈することで、CL が障害を持ちながら生きていく姿勢に寄り添った作業療法実践が促進される。

しかしながら、CL をどのような視点からどのように理解するのかということは、作業療法士が自分は“何をするべき人”だと認識しているのか、ということに大きく左右される。すなわち、CL の生きる姿勢に寄り添った共感的な態度で実践に臨むことが、その作業療法士にとって望ましい実践像であるのかどうか、もしくは、自分が作業療法士として行うべき実践であるのかどうか、という認識が、CL を理解する視点や、実践の内容を決定付けるということである。自分は作業療法士として“何をするべき人”なのかという認識は、すなわち、“自分はある専門職として何者なのか”という問いに等しく、作業療法士としてのアイデンティティを意味する。

そこで、続く第 2 章の『現場で働く作業療法士が有する専門職アイデンティティ』に関する研究では、作業療法士の専門職アイデンティティに着目した。現場で起こっていることは何かという問いに適し、帰納的に理論を作り上げていこうとするグラウンデッドセオリーアプローチ（Strauss ら 2004，Corbin ら 2012）に基づいて、半構成的インタビューを行った。専門職アイデンティティのある程度の確立が期待できる、経験年数 6 年目以上の現場で働く作業療法士を研究参加者とした。経験年数 7～27 年目の作業療法士 22 名が研究参加者となり、専門職アイデンティティの実感や作業療法士の独自性、専門価値、他者からの認識に関して、1 回 40～85 分の個別インタビューを行った。データ分析は、継続的な比較によるコード化、カテゴリ化、構造化を行った。

結果、参加者の専門職アイデンティティとして、【Ⅰ.障害特性と CL の生活との融合】と【Ⅱ.果たすべき使命としての CL 主権】という 2 つのコアカテゴリが抽出された。さらに、各参加者の専門職アイデンティティの内的構造には、【Ⅰ．障害特性と CL の生活との融合】優位型、【Ⅱ．果たすべき使命としての CL 主権】優位型、Ⅰ・Ⅱ併存型という 3 つのパターンが抽出された。参加者の内的構造の変動には、〈実践が“うまくいっている”実感〉、〈これまでの自分では“うまくいかない”体験〉、〈重要な他者からのフィードバック〉、〈専門職アイデンティティ基準の存在〉という 4 つの要因が影響していた。専門職アイデンティティの構成要素と内的構造は、作業療法実践において、CL を理解する次元や、CL にとって望ましい実践像、CL の作業療法への参加度、CL の望ましい変化、CL への心理的な侵襲性、実践や効果の可視性、実践の効率、作業療法士としての自信に関して、その内容や質を左右していた。

最後に、第 3 章では、CL の視点に立って行った第 1 章の『身体に障害を持って生きるクライエントの運動の意味』に関する研究と、作業療法士の視点に立って行った第 2 章の『現場で働く作業療法士が有する専門職アイデンティティ』に関する研究の総括を述べた。研究者が、片麻痺を有することになった CL の経験の語りからテーマを抽出したプロセスは、CL を実存的に理解するとはどういうことなのかを具体的に示した例とも言える。一方で、作業療法士が自身のアイデンティティの中に、コアカテゴリⅠで表される身体的、心理的、社会的な視点だけでなく、コアカテゴリⅡで表される実存的な視点も持っていたことが示されたことは意義深い。医療や福祉の現場において、実存的な観点からの実践は、作業療法士にとって重要な専門性になり得る。ただし、専門職アイデンティティの理想的な内的構造は、実存的な観点を強調したⅡ優位型ではなく、Ⅰ優位型とⅡ優位型との強みを包括的に兼ね揃えたⅠ・Ⅱ併存型であった。

本稿では、CL と作業療法士の双方にとってのより良い作業療法実践を目指すために、まず、CL の視点に焦点を当てた研究を行い、次に作業療法士の視点に焦点を当てた研究を行った。しかし、作業療法が行われる現場では、CL と作業療法士の双方を切り離すことは不可能であ

り、双方があるコンテクストの中で相互に作用し合いながら作業療法が作り上げられていく。作業療法士が理想的なⅠ・Ⅱ併存型の内的構造を持つ専門職アイデンティティを形成し、安定させることを援助するためには、その形成プロセスを明らかにする必要がある。その際、CLと作業療法士とその相互作用、およびそのコンテクストの全てを切り離すことなく一つの塊として捉え、そこで生じている現象を明らかにしていくことが今後の課題である。